

# うらやましい人

橋本大二郎  
(高知県知事)

子どもの頃、よく「尊敬する人物は」と聞かれたものだが、僕は、この質問が苦手だった。といふのも、この質問に對して、身内である父の名をあげるのは、はばかられる気がしたし、かといつて、見も知らぬ人の教訓じみた生き方に、やすやすと共感する気にはなれないという、いたつて、ひねくれた物の見方をする少年だったからだ。

そんな訳で、今もって、尊敬する人物の欄は空欄のままだが、人生も五十半ばを過ぎると、他人の生き方を見ていて、尊敬とはひと味違った、ある種のうらやましさを感じることがある。その代表的な一人が、高知県が生んだ植物の鉄人、牧野富太郎博士だ。

僕が知事になつて、しばらくたつてからのことだが、牧野さんの記念館を、新しく建て直す話が持ち上がつた。正直を言うと、初めはそれ程乗り気ではなかつたのだが、牧野さんの生き方を垣間見るうちに、これはただならぬ人だと認識を改めた。

高知市内にある、新装なつた記念館の書庫には、蔵書が所狭しと並べられているが、植物の専門書はもとより、童話や小説、戯曲など、ありとあらゆる本がそろえられている。多分、どんな

分野の本にでも、どこかに植物にまつわる話題が出てくるからだろう。

こうした蔵書のバラエティーにも圧倒されるが、何と言つてもすごいのは、牧野さんの描いた植物画だ。例えば、根っこに生えた、ひげのような纖維など、虫眼鏡で見ないと見えないような細かい線も、一つ一つ正確に描写されている。

聞くと、最も細い筆は、京都の職人に特注をしたもので、ねずみの毛を三本束ねた筆だった。ところが今は、日本古来のねずみが、外来のどぶねずみに駆逐されたため、細密画用の筆は、ねずみの仇敵、猫の毛に取って代わられたというから皮肉な話だ。

このように、仕事ぶりの一端をのぞいただけでも、とても暮らしが楽そうには見えないが、想像通りの貧乏暮らしで、妻の寿衛さん<sup>すえ</sup>の大切な任務の一つは、借金取りの相手をすることだった。ただ、その渦中に旦那様がご帰宅になると、かえってややこしいことになるので、借金取りが来ると奥さんは、門の前に、赤い旗を出すことにしていた。家の前まで来て、この危険信号を見た牧野さんは、あわててきびすを返したということだが、幸せの黄色いハンカチとは、似て非なる愛の物語だ。

こんな苦労をものとせず、十三人の子どもを育ててくれた寿衛さんを偲んで、牧野さんは、奥さんが亡くなつた翌年、仙台で見つけた新種の笹を、「スエコザサ」と命名した。これもまた、古き良き時代の話かもしれない。

などというと、清貧に甘んじる堅物<sup>かたぶつ</sup>を思い浮かべがちだが、さにあらず、結構洒落<sup>しゃれ</sup>た一面も持ち合させていた。これは、インドの独立の英雄、チャンドラ・ボースさんが来日した時の話だが、

牧野さんと会った彼は、何か記念になるものをと所望した。これに応えて牧野さんは、取り出した色紙に、この世にこんな物があるから、人の苦労が絶えないという意味で、「三千世界にこの物ありて、人の苦労がたえやせぬ」と書いた後、その余白に、元気にそそり立つ男性自身の絵を描きそえた。これを見てボースさんが、どんなリアクションをしたかは知る由もないが、植物画に勝るとも劣らぬ迫真的出来ばえで、そのおおらかさが何ともほほえましい。

また、九十五歳で亡くなつた牧野さんを、晩年、東京の自宅に訪ねたことのある、高知の人の話によると、牧野さんが、「君は吉原に行つたことがあるか」と尋ねるので、「いいえ」と答えると、「もつと社会勉強をしないといけないね。僕は、今も行つてるよ」と言われたという。何とも、うらやましい元気さだ。

ただ、こんな自由奔放さが、かえつて疎んじられたのか、学界ではその業績を無視され続けた。牧野さんの書いたものを読んでいると、採集した植物についてきたアリを、ひねりつぶすことが出来ず、そつと庭に逃がしてやる話が出てくるが、小さなアリに、学界という巨象を前にした、自らの姿を置きかえていたのかもしれない。

そんな牧野さんにとって、面目躍如たる出来事があったのは、アメリカからコルター博士といふ、著名な植物学者が来日した時のことだった。その歓迎の席で、当時一流と言われた学界の先生が、次々と紹介されたのだが、その数があまりに多かったため、来日したばかりの博士は、途中からは、座つたまま会釈をしていた。ところが、これといった肩書きのない牧野さんが、「ミスター・牧野」とだけ紹介されると、すくと立ち上がって、「オオ、グレートマキノ」と、大きな声

を上げながら、牧野さんの手を握りしめたのだ。その場に居合わせたお歴々の驚きは、四十三歳のサラリーマンに、いきなりノーベル賞を出されてあわてた、日本のお役所の受けた衝撃に、似ていたのかかもしれない。

記念館に行くと、草むらで植物を手にしながら、満面に笑みを浮かべた、牧野さんの写真がある。どこか、AINシュタインを思わせる風貌だが、貧乏をものともせず、好きな道を一本に貫き通した、わが人生ここにありの一枚だ。

戦後生まれの我々の世代も、程なく還暦を迎えるが、この間に、日本人が失ってきたものは数多い。その第一に、亭主のわがままを黙って受け入れてくれる奥さんの存在をあげたら、フェミニストから一斉攻撃を受けそうだが、牧野さんの人生には、僕たちが失ったものの多くが、凝縮しているように感じられて、正直うらやましさを禁じ得ない。

たとえ尊敬などされなくても、後世、ひと様にうらやましがつてもらえるような日本人になりたいものだと、牧野さんの生き方を知るにつけ、つくづく思うのだ。

(「文藝春秋」十二月臨時増刊号)